

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



美しい正しい言葉→届く響く言葉

先日の企業面接の豪にもコメントが届いていました。

面白かったです。

その仕事は【母親】でしょうか。

ペンネーム「桜さくら」さんより

桜さくらさんありがとうございます。

まさに前々号で紹介した通り、正解は「お母さん」です。

「親の愛」は、いろんな角度から教えたり、きづかせてあげることが可能ですが、その際にできる限り子どもたちの心に響く形で届けたいというのが教育者としての願いです。

例えば「みんな仲良く」は、全国津々浦々の学校で今もよく伝えられている言葉です。

みんなが仲良くという姿を目指すことは、一面的には正しいのでしょう。

みんなが仲良くという姿は、きっと多くの人目に美しく映るのでしょう。

誰しも好んで争いや諍いを行うわけではありませんし、毎日仲良く平和に暮らせればそれは素晴らしいことだと多くの人と思うはずです。

一方で、この正しくも美しい言葉が、現場ではほとんど教育的な効果をもたらさないことを多くの先生は知っています。

なぜならば、「仲良く」の言葉の定義にもよりますが、そもそも「みんな」が「仲良く」という状態は、通常では考えられないことだからです。

約30人もの子どもが集まるクラス。

100人以上の子どもが集まる学校。

小競り合いがあれば、ぶつかることだってあります。

それが、自然だし普通です。

当たり前のことです。

そして、そういう一つ一つのことを乗り越えていくことには、極めて大きな教育的意義があります。

それを一斉に「みんな仲良くしなさい」と言ってしまう事は、どこか不自然というかひずみを生じさせてしまう一因になると思っています。

そもそも、大人の世界で「みんな仲良く」がおおよそ実現不可能なことも、大人のみなさんならよくご存じのはずですよ。(笑)

つまり、「みんな仲良く」という言葉は、美しくて正しいのだけれど、残念ながら子どもたちに届きもしなければ響きもしないのです。

にもかかわらず、この言葉は現場で使われ続けています。

それどころか、

「なんで仲良くできないの！」

「仲良くしなさいっていつも言ってるでしょ！」

と相手を厳しく指導する際の材料としても使われたりしています。

ここまでくると、これはもう正しさや美しさという名の暴力に近いとすら私は思ってしまいます。

そのように指導され続けた子が、「みんな仲良く」という言葉にアレルギー反応すら起こすようになることもあるでしょう。

同じように「親の愛の尊さ」に気づいたり思いを馳せることも、学校現場では美しくも正しい直球ばかりが放られることが多いのです。

だからこそ、意外なところから意外なコースで届く変化球の球種をふやしたいと思っています。

そうした思考の中から行きついたのが、先の企業面接の例でした。

実は、こうした球種は他にもたくさんあります。

今一つふと思い出した実践に、「一粒の豆」というものがあります。

以前に6年生を担当した時に行った授業の一つです。

1年生でこの授業をすることはまだ考えにくいですが、いつかこうした内容を受け取れる日が来た時には、届けてあげたいと思っています。

少し長くなりますが、その時の通信から引用します。

お時間ある時にでもお読みいただければ幸いです。

親の愛はシンプルではないだけに、扱う事教える事には相当の難しさが伴うこともご想像頂けると幸いです。以下、6年生になったつもりで道徳の授業を受ける姿をイメージしながら読んでいただければと思います。

一生懸命

【一生懸命。読みます。】

■ 一生懸命！

【今まで一生懸命にしたこと、例えば何がありますか。ノートに短く書いてもらいなさい。】

（子どもたち、ノートに意見を書いていく。）

【一つ書けた人から発表します。】

- 暗唱の練習です。
- 百人一首です。
- 鉄棒の逆上がりです。
- 漢字の勉強です。
- 算数の間違い直しです。
- 楽器の練習です。

（発表はさらに次々続いた。）

【その一生懸命は、誰のためですか。】

- 自分です。
- 自分のためです。
- 自分のためです。

【今日は、ある家族の話をもってきました。】

（スマートボードの画面を見せながら、資料を読み聞かせる。より落ち着いた雰囲気を作るため、教室前面はやや暗くした。）

私は一粒の豆を自分の生きがいに行っている母親を知っている。

その母親には二人の息子さんがいる。

この一家に悲劇が訪れたのは上の子が小学三年、次男が小学一年のときである。父親が交通事故でなくなったのだ。誰に責任があるのかはっきりしない事故だったが、最後には、亡くなられた上に加害者にされてしまった。母親は、事故の責任をとるため土地も家も売り払わねばならず、残された母親と子ども一人は文字どおり路頭に迷うことになった。

各地を転々とした後、やっとある家の好意にすがって、その家の納屋の一部

分を借りた。三畳ぐらいの広さの場所にムシ口を敷き、裸電球を引き込み、七輪を一個、それに食卓とこどもの勉強机をかねたミカン箱一つ、粗末なフトンと若干の衣服…これが全財産であった。まさに極貧の生活である。

お母さんは生活を支えるために、朝六時に家を出て、まずちかくのビル掃除をし、昼は学校給食の手伝い、夜は料理屋でサウ洗い、一日の仕事を終えて帰ってくると、もう十一時、十二時。だから一家の主婦としての役割は、上のお兄ちゃんの肩に全てかかってきた。

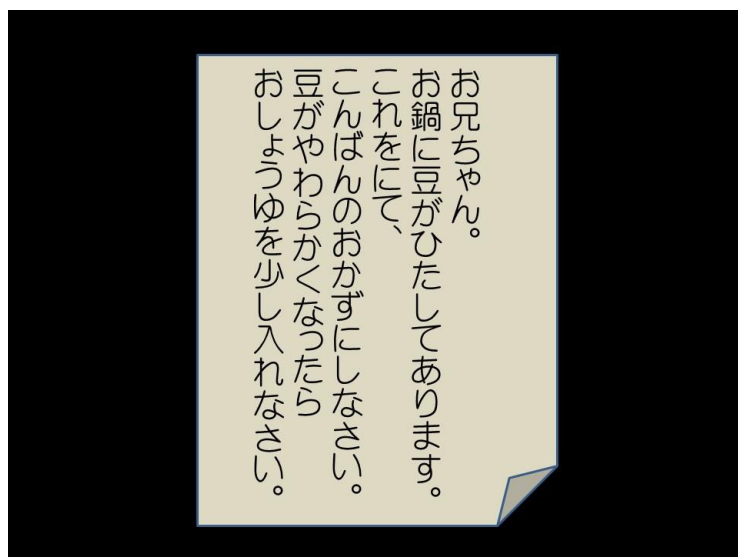
そんな生活が半年、八か月、十か月と続いていくうち母親はさすがに疲れ果ててしまった。ロクに寝る間もない。生活は相変わらず苦しい。こどもたちも可愛そうだ……申し訳ないけれどもう死ぬしかない。二人の子どもといっしょに死んで、お父さんのいる天国へ行こうとそればかり考えるようになった。

ある日、お母さんは鍋の中に豆を一ぱいひたして、朝出がけにお兄ちゃんに置き手紙をした。

「お兄ちゃん。お鍋に豆がひたしてあります。これをにて、こんばんのおかずにしなさい。豆がやわらかくなったらおしょうゆを少し入れなさい」

その日も一日働いて本当にくたびれ切ってしまった母親は、今日こそ死んでしまおうと、こっそり睡眠薬を買って掃ってきた。二人の息子はムシ口の上に敷いた粗末なフトンで枕を並べて眠っていた。

お兄ちゃんの枕元に一通の手紙が置いてあるのに気がついた。お母さんはなにげなしに手紙を取り上げた。そこにこう書いてあった。



お母さん、
ボクはお母さんの手紙にあったように
一生けんめい豆をにました。
豆がやわらかくなつたとき、
おしょうゆを入れました。
でも、
夕方、
それをごはんのときに出してやったら、
お兄ちゃんしょっぱくて食べられないよ
といって、
かわいそうに、
つめたいごはんに水をかけて、
それを食べただけで
ねてしまいました。

お母さんほんとうにごめんなさい。
でも、お母さん、ボクを信じてください。
ボクはほんとうに一生けんめい豆をにたのです。

お母さんおねがいです。
ボクのにた豆を、
一つぶだけ食べてみてください。
そして、あしたの朝、
ボクにもういちど、
豆のにかたをおしえてください。
だからお母さん、
あしたの朝は、
どんなに早くてもかまわないから、
出かける前に
かならずボクをおこしてください。

お母さん、
こんやもつかれているんでしょう。
ボクにはわかります。
お母さん、
ボクたちのために
はたらいているのですね。
お母さんありがとう。
でも、お母さん、
どうかからだをだいじにしてください。
先にねます。

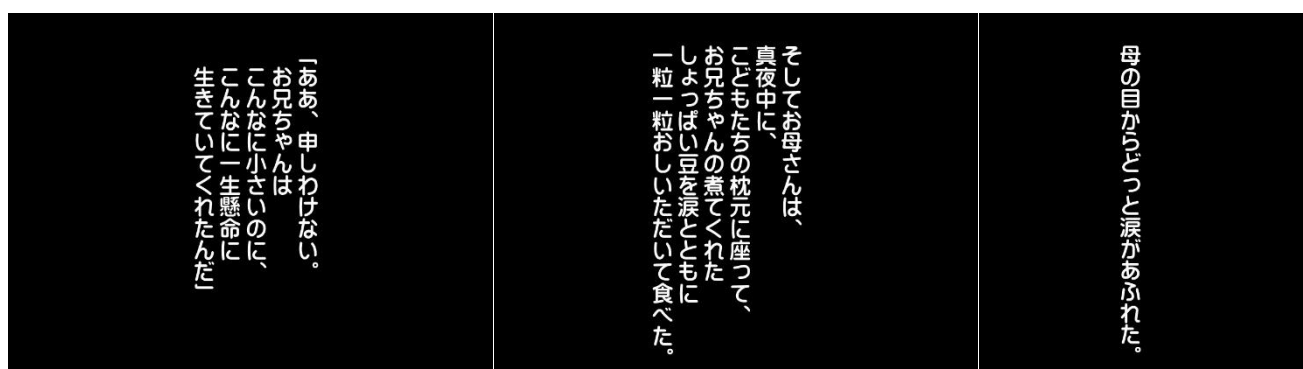
おやすみなさい

母の目からどっと涙があふれた。

「ああ、申しわけない。お兄ちゃんはこんなに小さいのに、こんなに一生懸命に生きていてくれたんだ」

そしてお母さんは、真夜中に、こどもたちの枕元に座って、お兄ちゃんの煮てくれたしよっぱい豆を涙とともに一粒一粒おしただいて食べた。

たまたま袋の中に煮てない豆が一粒残っていた。お母さんはそれを取り出して、お兄ちゃんを書いてくれた手紙に包んで、それから四六時中、肌身離さずお守りとして持つようになった。



この時点で手で涙をぬぐっている子が数名。
誰一人動かず、シーンと話を聞いている。

【このお話の続きを読みます】

もし、あの晩、お兄ちゃんが母親宛ての置き手紙を書いてなかったとしたら、この母子たちはたぶん生きていなかっただろう。

一通の手紙、一粒の豆が三人の生命を救ったのである。

しかもそれだけではない。母親は気を取り直していっそうよく働き、その働く母の尊い姿を見つつ育った二人の兄弟は、貧乏のどん底でも決して絶望することなく、よく母親の手伝いをし、勉強をした。

それから十数年の歳月が流れた。お兄ちゃんも弟さんも明るく素直で母親思いの立派な青年に成長し、ともに世の教育ママたちが憧れている一流の国立大学を卒業し、就職した。

塾に通ったわけではない。

夜は暗くなると電気代を節約するため早く寝なければならないような生活だった。生育環境は劣悪そのものである。

そんな生活の中でいったい何がこの兄弟に作用したのか。
資料の朗読を一旦止めて、聞いた。

【兄弟に何が作用したのですか？】

- お母さんの姿
- お母さんが一生懸命働いたこと

資料の続きを読んだ。

母親が毎日を一生懸命に生きたことだったのである。それだけである。
その母親の後を子どもたちは、小さな足で一生懸命についてきた。

人間にとってもっとも大切なのは、

またまた資料を止める。

【人間にとってもっとも大切なのは、何ですか？】

- 一生懸命
- 一生懸命生きること

資料の音読を再開する。

毎日を一生懸命生きることである。

子ども達に一番初めの問いを再び問うた。

「一生懸命したこと」

「それは、誰のためですか？」

- 自分のためそして、親のため。
- 自分のためと、支えてくれる人のため

■周りの人のため

一生懸命

誰のため？

あなたの
まわりの
みんなの
ために。

【このお母さんと、みんなのお家の人と、どちらが一所懸命子どもを育てていると思いますか。お話に出てきたお母さんは特別なんでしょうか。】
(全員考え込む。すぐさま首を振る子もいた。)

みんな、自分のお家の人を思い浮かべてごらんなさい。

例えば、お母さんは、赤ちゃんにお乳をあげます。

お乳は、お母さんが食べたものの栄養でできています。

それを一日に六回も上げます。自分のための栄養も赤ちゃんにあげているのです。だからお母さんは、歯が悪くなったり、肌が荒れたり、病気にかかってしまうことさえあります。それなのに、赤ちゃんに「少しにしておくのよ」なんていうお母さんはいません。元気よく飲めば、それだけで安心します。

毎日毎日お風呂に入れ、汗水たらして丁寧に丁寧にからだをあらいます。夜中に起きてオムツを替えます。他人だったら感じる「汚い」「くさい」なんてことも全く気になりません。

風邪をひいて鼻水がつまると、赤ちゃんは自分でどうすることもできません。そんなとき、お母さんやお父さんが口で吸い取ってやるんです。

病気になれば、心配で心配で一晩中寝ないで看病します。赤ちゃんを抱いて夜中にお医者さんを探し回ることだってあります。

もう忘れてしまっているでしょうが、ここにいるみんな、一人の例外もなく何百回も何百回もそうしたことをして育ててもらいました。先生もそうやって育ててもらいました。でも、そのお返しをお家の人は何も期待しません。みなさんに元気に幸せに育ててほしい、それだけを願っているのです。

再び涙を拭いている子がいた。

最後に次の画面を映して、授業を終えた。

【今、あなたが生きているのは、あなたを育ててくれた人たちの「一生懸命」があったからです。】

今のあなたを
支えて
いるのは……

あなたを
育ててくれた
人達の
一生懸命

授業の後、みんなはひたむきに感想を書いていた。

真剣な表情で筆を走らせるみんなの姿が、そこにはあった。

2 学期。

アジアを中心に貧しい暮らしをしている子どもたちをサポートしている「池間哲郎さん」という方を紹介した。

著作『あなたの夢は何ですか？私の夢は大人になるまで生きることです。』の中で、池間さんが語っていることがある。

「最高のボランティアとは何か。」

このことについて、長年ボランティア活動に取り組んできた池間さんの答えが書かれていた。

募金することではない。

物を送ることでもない。

その答えには、「**まず自分自身が一生懸命生きること**」だと書いてあった。なぜ、自分自身が一生懸命生きることが、最高のボランティアなのか。

もしかしたら、少しずつ君たちも答えが考えられる時期に来ているかもしれないと思っている。

抜粋・引用はここまでです。ご感想などあれば、また教えて貰えると嬉しいです。(渡辺道治)

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)